

中央大学報国隊の結成

一九四一（昭和十六）年九月二十六日、中央大学報国隊の結成式が約五千人の学生の参加の下に、陸軍戸山学校で挙行された。新大久保駅前に集合した学生は、学部隊・予科隊・専門部隊の順序で行進を行い、戸山学校軍楽隊の行進曲に歩調を整えて分列行進に移り同校正門から入場、校庭で林頼三郎隊長の閲兵を受けた。式は、隊長代理山田三郎理事の訓辞、軍楽隊の演奏と続き、天皇陛下の万歳を三唱して閉会した。

山田理事は訓示の中で報国隊結成の目的を「指揮系統の確立せる組織の下に学生生徒の資質を向上せしめ以て国防能力の増進に資する」「一朝有事の際学長たる隊長の命令一下極めて迅速且確実に国防的諸般の任務に従事する」「現在非常時局下に於ける国策的各種の勤務に服する」等と述べているが、報国隊の結成によって学内の軍隊組織化が完成したということができよう。

学校報国隊の結成は、直接には同年八月八日の文部省

毒、整理、救護の四班に分けた学生防護団が組織され、校庭で防空訓練として防護団の基礎的訓練演習を行っている。また二五年九月に始められた教練も、当初予科のみが必修であったが、三五年に専門部、三九年には学部でもそれぞれ必修となり、四一年には学友会各部が中央大学奉公団に編成替えされるなど、学内の軍隊化が進められていた。

結成時の「中央大学報国隊編成表」によれば、中央大学報国隊は、林学長を隊長に、学部隊、専門部隊が学年ごとにそれぞれ三大隊、予科隊が全体で一大隊とされ、他に特別警備隊・特技隊（自動車隊・乗馬隊）からなる

特別隊により構成されていた。各大隊はそれぞれ二・四中隊からなり、その下に五〇人前後の学生からなる小隊が設けられていた。

報国隊の幹部は山崎覚次郎経済学部長、吉田良三商学部長、森田実予科長ら九人が本部付となり、大隊長および中隊長には学部隊第一大隊長岩田新以下各教授がその



中央大学報国隊腕章

訓令「学校報国団体制確立方」によって、中等学校以上の学校に軍事教練や食糧増産作業に従事する指揮系統の確立した学校全体の組織の編成が命じられたことにもとづいている。また、同年十一月二十二日には「国民勤労報国協力令」が発せられ、学校報国隊が本格的に勤労作業に動員されるようになる。

そもそも大学を戦時体制に組み込むための政策は、三八年四月の国家総動員法公布を契機とし、同年六月、文部省が「集団的勤労作業運動実施二関スル件」を通牒して以来、「学校報国団ノ組織ニ関スル要綱」（四〇年）、「青少年学徒食料飼料等増産運動実施要項」（四一年）などが次々と発令され、また三九年夏からは諸大学から学生の代表を興亜勤労報国隊として派遣するなど、その下地が形成されつつあった。

このような状況の中で本学でも、四〇年九月には山田三郎理事を団長に学部二年生・専門部一年生を防火、防任にあたり、各小隊長には学生が任じられた。早速、翌十月二十日から陸軍機甲整備学校で十日間、十一月十日から深川の陸軍糧秣本廠^{りょうもくほんあん}で二十日間、本学報国隊が勤労作業に服したことが確認できる。また、報国隊は学内の警備や学校行事での活動、学外での勤労動員や援農に加え、各警察署・消防署等で訓練を受け、警察・消防等と協力して学外での任務にもあたっている。

結成から二年たった四三年十二月一日の報国隊命令書には、各部隊（大隊）ごとに、本学特設防護団、防空補助隊、消防補助隊、特別警備隊と任務によって分けられ、警戒警報・空襲警報に際し、防空補助隊は各警察署、消防補助隊は丸の内消防署にそれぞれ集合し、その補助にあたることが定められていた。

四二年四月の『中央大学新聞』は、「敵機神洲^{しんしゅう}を襲ふ 白門報国隊」と題し、四月十八日の空襲に際して本学報国隊が「ゲートル腕章も凛々しく駆け集るや直ちに長南大佐、出羽主事其他各幹部の指揮により或は学園警備に或は人影絶えた街を堀留署に丸の内署に駆けつけ警戒団員と協力、交通整理に警備に救護、消防に日頃の訓練に物を言はせた」とその活躍を紹介している。